

献 辞

ウィリアム・ブレイン教授は平成23年3月31日をもって名古屋外国語大学を退職されることになりました。

ブレイン先生はオーストラリア・カソリック大学（哲学・言語学）、シドニー大学（英語・政治学専攻）をご卒業後、産業・貿易省の輸出調査官として務められたのち、イタリア、ポルトガルにおいてブリティッシュ・カウンシルの英語学校で語学教師としてのキャリアをスタートされ、スイスの商業学校で教師を勤められたあと、1978（昭和53）年から5年間はスイスでご自分の英語学校を開き教えられました。

その後イギリスのレディング大学の大学院で英語教育のMAを取得され、1986（昭和61）年にはイタリアのトリノ大学でEnglish for Academic Purposesを教えられます。

先生がのちに名古屋外国語大学においでになることになるについては、レディング大学の夏期英語講座ではじめて日本人の学生に英語を教えることになったところに、ちょうど私が東大から実験音声学の研究で同大学に単身で出張中であったことが下地になっています。

午前と午後のSenior Common Roomでのティータイムや、さらにはお宅に招かれての食事の際に、日本人に英語を教えることなどをめぐっていろいろな話をするようになりましたが、何事も先入観から決め付けず、広い視野でやわらかく受け止め、それを認めるところから対話を始め、じっくりと議論を進めて行く、という先生のコミュニケーションのあり方は、先生ご夫妻と、当時幼かったご子息の3人のご家庭の中でも実践されているものでした。

日本には1990（平成2）年においでになり、新潟大学で3年、筑波大学で5年教えられるうちに、控え目な学習態度の日本人学生を如何にコミュニケーションに積極的に参加させられるかをテーマに、学習者の自発性を

尊重し、自己との対話と相互の学びをもとに自分の意見を作り上げ、それを伝えることで新たな対話を生み出す、という手法を開発し発展させてられました。科学研究費の補助を受けたこの手法については先生のホームページに詳しく述べられています。(www.creativediscussion.org)

先生の授業では、学生は身のまわりのあらゆることに興味を持つよう求められ、それについて自分の頭で考えること、そしてそれが身の回りの人に伝わるように口頭でまた書面で発表することが課題の中心となります。そのため、学生が年間に書いたレポートを積み上げると1メートルになるということでしたが、落第した学生は先生の20年間の教授生活において一人もいなかったとのことでした。

このような授業を通して、「コミュニケーションとは何か」ということを体験した学生たちは、幅広い興味と柔軟な姿勢で社会の一員として育って行くことでしょう。

いつも学生のため、大学のために自分がどのように役に立つことができるだろうか、と考えてこられる先生でしたが、これからはアーティストであるイタリア人のご夫人の故郷トリノとオーストラリアとの間を行き来なさることになるでしょうが、新潟の田んぼに囲まれた古い藁葺きの屋根の家で育ち、世界の研究者が訪ねてくる筑波の宿舎に暮らした経験をお持ちのご子息は、本学の日本語教育センターの出身でもあり、ご両親の言語のほかに日本語にも堪能であることから、今後もしご一家の日本とのかかわりは続くものと思われます。

先生ご自身の、またご家族のご健康をお祈りします。

2011年3月31日

副学長

外国語学部長

松野 和彦